

機関研究 ● 「包摂と自律の人間学」領域  
ケアと育みの人類学 (2011-2013)

### 好きなことはケア

「好きなことはケア」という言葉に出会ったのは、アーミッシュのワンルーム・スクールを訪ねた時のことである。「ウェルカム」と書かれた紙が貼られた教室で子どもたちの歌を聴きながら、1人1人が好きなことや夢を記したノートを見ていた。「ケア」の内容はというと、食べ物を届けるなど祖父母と過ごすことや、

小さな動物たちの世話などが書かれていた。それらは、引退した親たちが子どもの家族に母屋を譲って新しい部屋「グロース・ドーフ・ハウス」を増築して一緒に暮らすこと、馬をはじめ様々な動物たちを飼うというアーミッシュの日常の生活習慣と密接に結びついている。

この言葉に込められた「ケアする」ことの意味は、ケアが必要とされる人々や動物を保護し世話することに留まらず、各人がやりたいと思うことを起点として、共に毎日を生きて生活そのものである。「ウェルフェア」という言葉で指し示されてきた国家・社会を単位としたシステムとしての配慮や支援のみならず、個々人の多様な「ウェルビーイング」に基づく「関心」から生まれるケアの数々が重なり合っはじめて私たちの生活やその場の姿が見えてくるのではないのか。

### 生への関心としてのケア

アーミッシュの人々は、キリスト教プロテスタントの一宗派である。ルターやカルヴァンの宗教改革に満足せず、より「純粋な」信教のかたちを希求した。宗教専門職者を介せずに聖書の意味するところを各人が解釈し、その結果、成人が自ら洗礼を受けてキリスト者となることを主張したため「再洗礼派」と呼ばれ、激しい迫害を受けた。18世紀にアメリカへ移民した後も、信教に基づき、非暴力、近代文明の非適用、公教育の制限などへの関心と主張、その実践としてのライフスタイルの保持によって、周りの社会と軋轢を経験してきた。だが合衆国のみならず現代アメリカ大陸で信徒が増加し続けているアーミッシュは、日々の実践を通して、自らを表現しさまざまな価値観をもつ人々とコミュニケーションしてきたのである。

### 非暴力の主張から生活の場の創出へ

非暴力の主張から徴兵に応じなかったことで批判されたアーミッシュを含む再洗礼派の人々は、代替活動として、病院や高齢者介護施設で働いてきた。そうした経験を生かして、現在、精神疾患や痴呆患者に対応する病院を含む医療介護施設、高齢者対象住居施設などを多数展開している。それらの



キルティングをするアーミッシュ (2009年10月27日、カンザス州ヨードー Yoder)。

特徴は、施設を生活に必要な機能を付与したライフケア・コミュニティというかたちとすることや、施設をリンクさせて人々のウェルビーイングに応えようとしていることだ。

たとえば、大学町インディアナ州ゴッシェンの高齢者専用住居施設は、大学、教会、そして病院と隣接しており、高齢者たちは施設敷地内に点在する機能を利用し、歩いて

近隣の施設に出かけ様々な行事に参加することができる。教会は、季節ごとのイベント、食事会、情報交換やボランティア活動の場となっている。礼拝後に近況を報告しあったり、ここから連れだって病院に友人を見舞うこともある。

### ケアの表現としてのキルト

教会の多目的室でボランティア活動として定期的に続けられているのは、キルト作りである。アメリカ合衆国ではキルト作りが盛んに行われてきた。人々が大事に繰り返し使った布の最後のかたちとしての端切れを縫い合わせたトップに、中綿、裏布を合わせて生活用品として生まれ変わったキルトは、移民してきた人々の生きる姿勢のシンボルでもあった。

アーミッシュは、信条に従い、謙遜や控えめであることが重視され、決まった色の無地の布の衣服を着用している。この布のみを使用したキルトは、人々のアイデンティティを表現する。一方で、人生の節目や大切な人の出立に際して贈られるキルトは、組み合わせを考えて丹念に縫い合わされ、豊かなキルティングが施される。キルトは、ふつうの人々が日常のなかで力を合わせると1人1人の力の合計よりも大きなものを生み出すことを示すものともとらえられている。

他方、信条に従い、被災地の人々などへの支援を目的として製作されるキルトは、色や無地であることにこだわらず、実用的なものや、あるいは高い値がつくファンレージング用として、ボランティアによって作られる。

信条を表現する活動とはいえ、キルト作りは、集まる人々に楽しみの時間をもたらす、さらには、ボランティア・コーディネータなど新たな仕事をも生み出している。キルト作りは、人々が関心をもつことや信じることの実践が、新たな関係性や活動の場の育みに繋がっていることを明示している。

### ケアが育む街の環境

ケアとしての非暴力の主張は、いつしか、高齢者が住みたい町を創る多様な活動に繋がっていた。中西部のゴッシェンは、高齢者が帰ってきたい町としても知られている。ライフケア・コミュニティの存在はもちろん、高齢者ボランティアが

活動する場が豊富であることも理由である。最近、町を活性化する運動の一環を担い中心街に開店している Ten Thousand Villages は、再洗礼派メノナイトが運営するフェアトレードの店舗だ。ここでも世界各地から集まる品々について学び客に情報を伝える高齢者ボランティアが活躍している。活動時間は自由に選べるし、宗教的背景も問われないので、誰でもボランティアをすることができる。信教に基づく関心としてのケアの展開が、多様なライフスタイルをもつ人々が共有する場として展開しているのである。

### 公教育の否定と「教育」観

義務教育期間を満たすのを待たずに子どもたちを学校から取り戻すアーミッシュの親たちの態度は、教育当局の方針と対立した。かれらが守りたかったものは、子どもに様々なことを伝えるためには、適した時期と環境があるという信念である。若者にとって大切な、アーミッシュとなることを決意して洗礼を受けることや結婚するにあたって、子どもたちは生きるためのヴァナキュラーな知恵と技術を身につける必要があり、また、アーミッシュではない、他の生き方をするということについて考えてみる「ラムシュプリング」という奔放な放蕩の時期をも経験しなければならない。それらは、学校で習得する知識だけではなく、礼拝や人生儀礼に参加すること、家庭や仕事場で役割を果たすことを通して学ぶことなのである。いずれも、共に食し歌い語り合う時間がともなっている。

裁判を経て、信教の自由に基づき、家庭で子どもの教育を行うことが認められた。その後、アメリカ合衆国における家庭での教育には、アーミッシュに限らず、人々が大人と子どもの人生の過ごし方を考えつつ適用する傾向がみられる。家族で長期の旅をする機会を得ることや、子どもが自分で学ぶペースに合わせて、図書館や複数の学校を利用できることなどが特徴である。いずれも、生きている意味や環境を考える機会を、ライフコースに緩やかに位置づけるという志向がみられる。

### 養生の場としての生活空間共有へ

近年、「育み」・「育む」という表現が、「いのちを育む」のように教育学の分野で用いられている（たとえば、吉岡・大川『いのちを育む教育学』春風社、2008年）。この「育む」に込められたメッセージは、人間の成長にあたって、近代以降の学校教育に代表されるような教育に限定されない、人間の全体性に配慮した働きかけが不可欠であること、である。「教育」の再考を意図して提示される「育」は、アーミッシュのこだわりと主張をもきっかけとして耕されてきた教育空間とも呼応する。



Ten Thousand Villages (2011年10月5日、インディアナ州ゴッシェン Goshen)。

漢字としての「育」がもつ意味あいを迎ると、それは、子どもを胎内で育む女性の姿を表現しているといわれる。子どもを守り母の栄養を届ける役割をしているのは、「胞衣」だという。すなわち、胎内にあって、すでにくつもの要素の協働によって胎児が生かされているというのである。

「育」についてはさらに、子どもが誕生する情景を表しているとされる（寺崎「生を養う」『高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働』御茶の水書房、2010年）。誕生の場では、出産の近代化とともに、関わる人やモノが大きく変化した。女性が子どもを産み出す姿勢の変化は、幾人もの人たちに支えられ、ときに超自然の力をもたのみとした出産から、医療専門職者のみが対処する出産への移行と連動する。この変化とともにアメリカでは、産婦とともに女性たちが生活し出産を迎え、産後の「グローニング・パーティ」を祝うという習慣は消えた。グローニングは、分娩のうなり声とテーブルいっぱいの料理を表現しているとされている。「育」には、生に関わって多様な要素が協働する姿が刻み込まれている。

だが、「教」が加わることによって、そうした要素が消えてしまったとは限らない。「教」という漢字に関しても、植物を使って子どもの未来を占う行為を表す（寺崎・周『教育の古層』かわさき市民アカデミー出版部、2006年）。「教育」は、多様な人やモノ、スピリットなどを信頼しその力を集めることによって、ようやく新たな生命を得て共に生きる人々の姿を表していた。「学校」という漢字が、年1度、収穫物を愉しみ神と交流する場を意味していたということからも、「教育」には、人々が関わりつつ人生を渡ってゆくためのしかけが鑿められていたことが伺われる。「教育 education」の語源を辿った場合でも、「能力を引き出す」という意味は見当たらず、食を愉しみ養生するという営為が見出されるという（白水「教育・福祉・統治性—能力言説から養生へ」『教育学研究』78(2) 2011年）。

「ケアと育みの人類学」は、生をめぐる関心やこだわりとしての多様な「ケア」が、生きる場を共有することに繋がってゆく可能性について、生命を繋いできた各地域の実践に迫ることによって探ってゆく。こうしたテーマを、2011年度は、以下のシンポジウム・パネルを通して考えてきた。

- “Recontextualization of Technologies and Materials: Pursuing the Well-beings in Changing Aging Societies in Japan and Korea” 2011年8月3日
- 「福祉と開発の人類学—広がる包摂空間とライフコース」2012年1月21日
- 「ケアと育みの人類学の射程」2012年1月28日
- 「エイジング—多彩な文化を生きる」2012年2月25・26日
- 「インクルーシブデザインが作り出すケアと育みの環境」[包摂した社会空間の実現にむけて] 2012年3月3・4日
- “Rethinking the Meaning of Culture in a Multicultural Aging Society” 2012年3月31日

#### すずき ななみ

先端人類科学研究部教授。専門は文化人類学・医療社会史。著書：『出産の歴史人類学』（新曜社 1997年）、『癒しの歴史人類学』（世界思想社 2002年）；編著書：『The Anabaptist Idea and the Way of Practicing Care (Senri Ethnological Studies 79), National Museum of Ethnology, 2012；共編著：『高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働』（御茶の水書房 2010年）；論文：『コミュニティ創生と健康・治療・食養生—18-19世紀南部におけるモラヴィア教徒の軌跡から』『アメリカ史のフロンティア I アメリカ合衆国の形成と政治文化』（昭和堂 2010年）